

映画の冒頭は、一人の若い兵士が銃を持ちながら、戦場の林の中で、怯えきって、逃走し続けるシーンです。彼の恐怖の息遣い、心臓の鼓動が伝わってくるようです。やがて敵軍に追い詰められ、撃たれて、倒れました。この銃声で、味方も応酬し、激しい銃の撃ち合いの音が林の中でこだましていきます。若い兵士は土に倒れて、死にます。あっけない死、孤独な死、絶望の死の場面です。

戦争は人殺しです。こういう戦場で、どれだけの若者が未来を断たれ、ぼろくずのように捨て置かれたことでしょうか。愛する家族を、未来の宝である若い命を、このように奪われていいのでしょうか。私の叔父も戦死です。戦死した人々を思うと、痛ましさに胸が痛くなります。



Elise and Otto Hampel

この映画はヒトラー政権に抵抗し、捕縛され、処刑されたドイツ人 Otto and Elise Hampel 夫婦の実話を基にしてドイツ人作家 Hans Fallada (1893 - 1947) が 1947 年に「誰でも一人で死ぬ」と題して発表し、絶筆となった作品を基にして制作されました。

労働者階級のハンペルはベルリンに住み、職工長として働いていました。同じアパートに住むユダヤ人老女が暴力を受け、ゲシュタポに追われ、飛び降り自殺をしますが、誰も助けることも出来ない、暴力、差別の社会でした。そんな時、最愛の家族の戦死の報を受け、生きる希望も失いました。このままではいけないと反ナチズム、反暴力、反戦の思いを人々に伝えたいと願い、葉書に記し、秘かにあちこちの公共の場所へ置くという、レジスタンスの方法を思いつき、実行しました。妻も「国防婦人会」に駆り出され、戦争協力を訴えることに耐え難さを感じていました。政権への抵抗は命がけです。二人は信頼し合い、助け合って、285 通の葉書によるレジスタンスを 1940 年 9 月から 1942 年の秋まで続けました。見つかった葉書はゲシュタポ当局に届けられました。筆跡、置かれた場所から、犯人が推定され、結局、発覚し、逮捕されました。けれども夫妻は、後悔することはなく、なすべきことをなしたという深い安堵感、確信を共有しています。1943 年 4 月に処刑されてしまいました。



ハンペルの手書きの葉書

以前、「白バラの祈り」という映画を見ました。ミュンヘンの大学生のグループが反ナチズムのパンフレットを作り、それを撒いて、発覚し、処刑されました。主人公の一人、女子大生ゾフィー・シオルも逮捕されましたが、裁判においても、良心に恥じる事の無い行為であると言い、ナチと対峙し、処刑されて行きました。このように、暴力的な政権に抵抗する庶民、学生がいたことに感動します。彼らの記録が残されているということは、ドイツは歴史を検証する国であるという面を示しています。

レジスタンスというと、武器を手にしたりする大掛かりなものがあり、成功する場合があります。ですから、現在は IS が、テロリズムという恐怖の手法を取っています。ハンペルやゾフィたちは葉書やパンフレットという非常に穏やかな手法で抵抗しました。それでも、処刑されてしまうのです。

日本でも戦争中は挙国一致、総動員令、という全体主義ですべてが進められ、しかも、暴力的に事が図られていきました。秘かにレジスタンスした人もいたでしょうが、怒涛のような戦争の波に飲み込まれて行きました。良心の自由や、信条を自由に表現することが封じられ、抹殺されました。そして、海外の膨大な人々の命、多くの若い日本人の命も抹殺されました。その時、この悲劇を止める方法がなかったのです。二度と戦争をして、人を殺してはならないということのために、新しい生き方、命を守る生き方をするために、日本国憲法が生まれたのです。今は表現の手段は格段に多くなっています。気付いた時には手遅れではないよう、良心に従って、自由に、意見を交わしたいものです。